

乳幼児期の情動調整の発達に関する研究の概観と展望

—保育の場を視野に入れた情動調整の発達の理解を目指して—

教育心理学コース 森田 祥子

Review of Developmental Studies on Emotion Regulation in Early Childhood:
For Better Understanding of Development of Emotion Regulation from the view of the Effect of Child Care

Sachiko MORITA

During the last several years, research on the development of emotion regulation (ER) has grown dramatically. One area that has received less attention concerns association between nonparental child care and the development of ER. Recently, many children experience nonparental child care in early childhood. So, it is important to study not only child-parent relationships but peer relationships and child-caregiver relationships experienced in child care settings on development of ER.

This paper reviews on the effect of child-parent relationships and peer relation on development of ER. Then first, the importance of examining the caregivers' role in development of ER is argued. And second, the necessity of studying the interplay among child-parent relationships, peer relationships, and child-caregiver relationships is emphasized.

目 次

- 1 問題
- 2 情動調整とは
- 3 母親との関係と情動調整
 - A 情動調整の発達と母親の役割
 - B 母親との関係と情動調整の個人差
- 4 仲間関係と情動調整
 - A 仲間関係における情動調整の発達
 - B 仲間関係と情動調整の個人差
- 5 家庭における関係性と保育における関係性との関連
- 6 まとめと今後の課題

1 問題

情動は、われわれの社会生活において、思考や行動を動機づけ、方向づけるという重要な役割を果たすものである(Lazarus, & Folkman, 1991; 坂上, 1999)。そして、情動を適切な喚起水準に調整することは、個人の適応に大きく関わる一方で(Thompson, 1990),

情動調整の困難さは身体・精神疾患の危険因子ともなりうる(Taylor, Bagby, & Parker, 1998)。こうした意味で情動調整は乳幼児期からの発達課題であるとされ、これまで乳幼児期の情動調整に関する多くの先行研究が積み重ねられてきた。

一方、近年の社会的関心として、いわゆる“キレる子”など自分の感情や行動をコントロールすることができない子どもたちの存在が注目されている。保育実践の指針となる幼稚園教育要領や保育所保育指針でも、乳幼児期における自己統制や自己抑制の育ちについて言及されており、子どもたちが自らの情動や行動をコントロールする力を育てることは、保育においても配慮すべき重要な側面のひとつとされている。また、毎日の園生活で子どもたちはうれしい、楽しいといった正の情動だけでなく、悲しい、腹立たしいといった負の情動をも経験しているのであり、子どもが自分の情動を調整しようとすることに力を貸していくことは日々の保育の中で必要とされることである(鯨岡・鯨岡, 2004)。こうしたことから、保育実践について考える上で、情動調整は着目すべきことのひとつであると思われる。また、多くの子どもたちが保育を経験すると

いう現状を踏まえると、保育の文脈における情動調整の発達についても実証的に検討する必要があるだろう。つまり、情動調整の発達についての示唆を得る上でも保育実践への示唆を得る上でも保育の文脈を視野に入れて研究することは実りが多いものと考えられる。

ところで、保育を経験することに含まれる様々な側面のうち、情動調整の発達と関わる重要な側面のひとつであると考えられるのは「保育者や仲間など家族以外の他者と関わること」である。保育所や幼稚園は、それまで家庭を中心とした社会に生きてきた子どもたちがはじめて体験する、家庭から離れた社会である(常田, 1997)。子どもはこの社会に参入することにより、保育者や同年齢の仲間といったそれまでとは異なる他者との関係を経験するのである。他者との関係は情動調整やその発達にとって重要な役割を果たす一方で、情動調整は他者との関係に影響することが多くの研究者によって指摘されている(Kopp, 1989; Walden & Smith, 1997など)。この指摘に従えば、保育の文脈において経験する他者との関係も情動調整やその発達に関連するものと考えられる。ただし、忘れてならないのは、子どもは保育の場へと世界を広げていく一方で、家庭での生活も続けていくということである。つまり、図1に示すように子どもたちは家庭と保育という異質な世界を行き来しながら毎日を送る(小松, 2003)中で、多様な関係性を生きていくことになるの

である。したがって、一方の文脈に焦点化するだけでなく、「家庭で経験する親や家族との関係、保育の場で経験する保育者や仲間との関係の双方が影響しあいながら、あるいはそれぞれ独自に、どのように子どもの情動調整の発達を支えていくのか」を検討することにより、より現実に即した情動調整の発達の様相を描くことができると考えられる。近年、こうした家庭と保育の相互の関連性について関心が向けられつつあるが(Shpancer, 2002)、情動調整の発達の文脈での検討はいまだ不十分である。そこで、本稿ではこの問題に関連する情動調整についての先行研究をレビューすることにより、保育を視野に入れて情動調整の発達を理解するための手がかりを得るとともに、保育実践上の示唆を得たいと考える。

具体的には、第一に、家庭において経験する関係として、主に母子関係に着目した研究を整理する。それにより、情動調整の発達に母親との関係がどのような役割を果たすのか、また母親との関わりの質が子どもの情動調整にどのように影響するのかについて検討する(図1の矢印①)。第二に、保育において経験する関係として、主に仲間関係を検討した研究を取り上げ、仲間との関わりにおいてどのように情動調整が発達するのか、情動調整が仲間関係にどのように影響するのかについての示唆を得たい(図1の矢印④)。このように、主に母子関係と仲間関係についての研究を取り上げるのは、情動調整に関する研究においてこれまでに多くの研究が積み重ねられているからである。一方、保育者との関係などその他の関係に焦点を当てた研究はあまりみられないというのが現状であることを指摘しておきたい。第三に、母親との関係と保育者や仲間との関係とが、相互にどのように関わりあいながら情動調整の発達に影響するのかについて示唆を得るため、関連する研究の知見を整理する(図1の矢印⑥、⑦)。最後にまとめと今後の課題について述べる。

次章では、先行研究の整理に先立ち、これまで明確な定義をせずに用いてきた「情動調整」という用語の定義をまとめておく。

2 情動調整とは

「情動調整(emotion regulation)」の定義や捉え方は、研究者によってさまざまである。近年、この点が指摘され、改めて概念を整理する試みがなされるようになってきている(Thompson, 1994; Walden & Smith, 1997; Cole, Martin, & Dennis, 2004など)。ただし、ここで

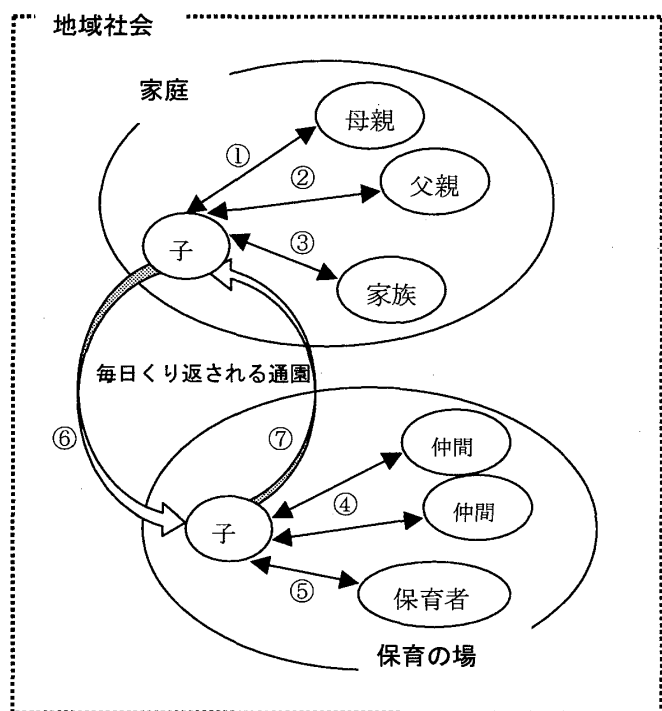


図1 幼児期の子どもたちの生活の場(小松, 2003を改変)

はそうした概念上の問題について深く立ち入ることはせず、「情動調整」という概念に含まれる要素を広く含んだ定義を示しておく。Cole, et al.(2004)によると「情動調整」とは、「喚起された情動に関連する変化をさすものである。喚起された情動により他の心理的プロセス(例えば記憶, 社会的相互作用)の変化を引き起こすこと(emotion as regulating)と、喚起された情動そのものを変化させること(例えば情動の強度や長さを変化させること; Thompson, 1994)(emotion as regulated)の両方を含む。また、喚起された情動の変化は、個人内(指しゃぶりによってストレスを低減する)においても個人間(子どもが沈んでいる親の笑顔を誘う)においても生じる」ものである。また、上記の定義に明記されていない点として、情動調整をひとつの反応ではなく進行する変化のプロセスとして捉える研究者が多いことも指摘しておきたい。例えば Thompson (1994)は、「情動反応の強さや長さの状態を監視・評価・調整する、内在的及び外在的なプロセス」として

いる。
本稿で取り上げる情動調整に関する論文はその大部分が、以上に挙げた定義の全体あるいは一部分を情動調整の定義としているものである。なお、情動調整は、快情動の調整も含む概念であるが、不快情動の調整が社会的適応にとって重要であるとの指摘(Kopp,1989)を踏まえ、ここでは不快情動の調整に焦点を当てる。

3 母親との関係と情動調整

まず、家庭における主に母親との関わりを通じた情動調整の発達について検討していく(図1の矢印①)。情動調整の発達に母親はどのような役割を果たしているのだろうか。また、母親との関わりは、情動調整の個人差にどのように影響しているのだろうか。ここでは、母親との関わりが重要な役割を果たすことが多くの研究によって示されている、乳児期後半から歩行開始期(toddlerhood)における情動の自己調整の発達について検討する。

A 情動調整の発達と母親の役割

Lazarusらは、情動を調整するための方略を問題焦点型(problem-focused)と情動焦点型(emotion-focused)に分類している(Lazarus et al.,1991)。問題焦点型は、情動の原因となった問題を直接解決することによる対処であり、情動焦点型は、情動の原因が何かに関わらず、気晴らしや注意を逸らすことにより情動的苦痛を

低減する対処である。乳児期から歩行開始期における養育者との相互作用を通じて、子どもは次第に、情動焦点型の方略の中でも情動の原因となった刺激ではない別のものに注意を移すことによる気晴らしを行ったり、問題焦点型の方略を使用して情動を調整することができるようになる。

Mangelsdorf, Shapiro, & Marzolf(1995)は、見知らぬ人と関わるという乳児にとってストレスフルな状況における情動調整方略を縦断的に観察した。その結果、12ヶ月児、18ヶ月児は、6ヶ月児よりも刺激の回避、他のおもちゃでの気晴らし、自己刺激(指しゃぶり、髪を触るなど)といった方略を用いていた。さらに、18ヶ月児においては自ら見知らぬ人に働きかけるといった問題焦点型の方略が見られた。また、Parritz(1996)によると、12ヶ月児よりも18ヶ月児の方が、不快情動の原因である新奇刺激を直接コントロールするという問題焦点型の方略を多く示した。また、母親を引っ張ったり押ししたりして刺激に近づくように要求する、母親に情報を要請するなど母親を利用した方略が18ヶ月児に多く見られた。さらに、母親による生後3~18ヶ月の子どもの対処行動の縦断観察記録を分析したKarraker, Lake, & Parry(1994)も、加齢に伴い、自分で問題解決を試みる、母親に情報を求めるといった対処行動がより多く見られるようになったことを報告している。こうした研究の結果より、問題焦点型の対処が18ヶ月頃から可能になることが示唆される。また、母親に援助や情報を求めるといった方略が見られることから、この時期の情動調整には母親が問題解決の資源として重要な役割を果たすと考えられる。一方、坂上(1999)は、18ヶ月から24ヶ月にかけて母親に頼った対処行動は減少し、実験者への援助要請が増加するという結果を見出した。この研究では、母親は積極的に援助せず子どもがひとりで取り組むように励ますよう教示されている。加齢に伴い、より有効な資源となりうる母親以外の大人を巻き込むことで情動を調整することができるようになると考えられる。

情動調整における母親をはじめとした大人の役割についてより明確に検討しているのが、大人が子どもと積極的に関わる条件と積極的には関わらない条件を設定し、両条件における情動調整方略について比較検討している研究である。例えば、遅延課題(魅力的な贈り物や食べ物を手の届かないところに置いておく)と分離課題(親が部屋から出て行く)において、子どもは母親が積極的に関わらない条件でより他者志向的方略(抱っこを求めるなど)を示した(Grolnick, Bridges, &

Connell, 1996)。また、母親への援助要請は母親が積極的に援助しない条件においてよく見られた(Diener, & Mangelsdorf, 2000)。このように、この時期の情動調整は母親への依存性が高いことが示唆される。

もうひとつこうした研究から示唆されるのは、子どもは母親をはじめとして大人が積極的に関わることでより洗練された情動調整方略を使用できるということである(Grolnick, et al., 1997; Bridges, Grolnick, & Connell, 1997; Diener, & Mangelsdorf, 2000)。例えば、Grolnick, et al.(1997)は、遅延課題と分離課題といった問題の解決が困難な状況においてはより洗練された方略であると考えられる、代わりのおもちゃで積極的に遊ぶことによる気晴らしが、大人が積極的に関わる条件においてより多く見られたと報告している。

こうした研究の結果から、母親をはじめとして大人は子どもの情動調整の「足場作り(scaffolding)」を行っているといえるのではないだろうか。足場作りとは、子どもが大人と一緒に課題を解決する際に大人は手助けをして課題をやさしくし、子どもが出来るようになるれば、徐々に子どもに実行を委ねていくということの意味する(Wood, Bruner, & Ross, 1976; 無藤, 1997)。母親は子どもの加齢に伴い自分ひとりで方略を使用する機会を与えるという結果(Grolnick, Kurowski, McMenemy, Rivkin, & Bridges, 1998; Spinrad, Stifer, Donelan-McCall, & Turner, 2004)もこの考え方を支持していると考えられる。例えば、Grolnick, et al.(1998)によると、遅延課題を12ヶ月児, 18ヶ月児, 24ヶ月児, 32ヶ月児に実施した結果、加齢に伴い母親が能動的に関与することが少なくなり、子どもの方から母親との遊びを開始することが増加したという。このように母親は、子どもの手助けをし、徐々に子どもに委ねていくという「足場作り」を行い、情動の自己調整能力の発達を促すものと考えられる。

以上のように、実験的手法による研究の知見から、母親は「問題解決の資源としての役割」や「足場作りを行う役割」を果たすことが示唆された。しかし、歩行開始期の日常場面における親子の相互作用を考えると、母親は常に援助的に関わる事が可能であるとは限らない。この時期、子どもの行動の制限やしつけの開始などにより、子どもが母親に対して不快情動をぶつける場面が頻繁に生じると考えられる。こうした日常の母子関係に不可避な葛藤状態を母子間で調和的な状態へと修復していくことも、情動調整の発達にとって重要であることが指摘されている(Bringen, Emde, & Pipp-Siegel, 1997)。この点に関連して、一母子の葛

藤的やりとりの発達的变化を質的に検討した坂上(2002)は、23~27ヶ月頃には、母子の関係が相互調整的なやりとりに基づく、より対等なものへ再編されていったと報告している。こうした葛藤的なやりとりを経験することを通して、子どもは自分の意図や感情を表現する方法や母親との関係を修復する行動を身に付け、母親との意図のずれや、心理的、物理的距離を調整することができるようになるのだろう。一方母親も、母子の葛藤における子どもの変化に応じて、より対等な相手として子どもと接する姿勢を身に付け(坂上, 2002)、子どもの自律的な情動調整の発達を促すのだと考えられる。

B 母親との関係と情動調整の個人差

母親との関わりが子どもの情動調整の発達を支えるとすれば、母親の関わり方や母親との関係性の質は、情動調整の個人差を生み出す要因のひとつとなると考えられる。

Nachmias, Gunnar, Mangelsdorf, Parritz, & Buss (1996)によると、愛着が安定型の子どもは、非安定型の子どもに比べてよりコンピテントな対処行動を示したという。子どもの愛着のパターンは、母親の感性や応答性と子どもの気質との相互規定的な作用によって形成される(遠藤, 1997)。愛着が安定型の子どもは、感性や応答性の高い親から適切な援助を得られやすく、親を活動拠点として積極的に問題解決に取り組むことができるのだろう。また、子どもの不安や恐れへの喚起が高すぎないことも適応的な情動調整方略の獲得と関連していると考えられる。

また、母親の相互作用のスタイルも情動調整と関連している(Calkins & Johnson, 1998; Calkins, Smith, Gill, & Johnson, 1998)。例えば、Calkins, et al.(1998)は、母親が子どもをコントロールするほど、クレヨンが遅延課題において、気晴らしすることができずにクレヨンに注意を向け続けてしまうという不適応的な方略を用いる傾向があると報告している。先に子どもの発達に応じて自分で情動を調整する機会を与えることの重要性について述べたが、反対に、母親が子どもをコントロールしすぎることは、子どもの自律的な情動調整の発達を妨げてしまうのかもしれない。

こうした母親の関わり方や母子の関係性の質だけでなく、子どもの気質や生理学的な特性などの内的要因も情動調整と関連していることは、多くの研究によって示されていることである(Fox & Calkins, 2003)。母親との関わりと子どもの内的要因との両方を組み込

んだ研究では、情動調整行動と、気質的な不快情動の反応性および愛着パターンとが関連していることが示されている(Braungart & Stifter, 1991)。また、金丸(2004)は、母子相互が、調整する手がかりとして情動を表出し、読み取るという「情動の利用可能性」(emotional availability; 以下 EA と記述)と情動調整プロセスの個人差との関連を検討した。その結果として、相互の EA が母子間で連動しあうことが葛藤場面で子どもの不快情動が表出されないことに関連していることを示している。このように、子どもの側の要因と母親の関わりとが相互に影響しあい、情動調整の個人差を生み出すことが示唆される。

今後、歩行開始期より後に母親はどのように子どもの情動調整の発達を支えていくのか、また、父親(例えば Bridges & Connell, 1991)やきょうだい(例えば Volling, McElwain, Miller, 2002)など母親以外の家族との関わりが情動調整の発達にどのように影響するのか(図 1 の矢印②, ③)等についても検討する必要があると考える。

4 仲間関係と情動調整

保育場面において経験する仲間との関わりは、情動調整の発達にどのように影響するのだろうか。また、その子どもの情動調整能力は、保育の文脈で仲間と関わっていく際にどのような役割を果たすのだろうか。こうした点についての示唆を得るため、以下に情動調整と仲間関係との関連に関する研究を整理する(図 1 の矢印④)。

A 仲間関係における情動調整の発達

川井・恒次・大藪・金子・白川・二木(1983)によると、仲間関係の役割は「その相互作用を通して自己や他者の認識を発達させること、そして大人との間には生じにくい多様な情緒の発生をみ、発達させ、その統制を学ぶことである」という。すなわち、仲間関係は情動調整の発達に大人とは異なる役割を果たすものと考えられる。しかし、仲間との関わりにおいて情動調整がどのように発達するかについて直接検討した研究はあまり見当たらない。ここでは、不快情動が喚起され調整の必要に迫られる状況であると考えられる対人葛藤やいざこざの発達的变化について検討した研究を参照することにする。

保育所の 0～1 歳児クラスで生じるいざこざについては、次第に身体攻撃や言葉での抵抗など直接相手に

向けた行為の割合が増加したことが報告されている(松永・斉藤・荻野, 1993)。このことから次第に怒りの感情が明確になり、相手に対して表出するようになると考えられる。また、この時期のいざこざは保育者の介入により終結することが多い(松永他, 1993)。これは、不快情動や相互の意図の調整は保育者によるところが大きいことを示唆しており、この時期の情動調整は母親への依存性が高いという知見とも一致する。この時期の子どもの発達に伴う保育者の介入の変化に関しては、次第に制止や代替物の提示は減少し、両者の意図や気持ちを確認した上で解決しようとするようになること、さらに、順番に使うことや一緒に使うことの提案など解決策の呈示が増加することが示されている(朝生・斉藤・荻野, 1991; 本郷・杉山・玉井, 1991)。このように保育者は、子どもの発達に伴い、子ども同士で自律的に葛藤の解決ができるよう関わりを変えていくのだと考えられる。一方、保育所の 2 歳児クラスでは、前期から中期にかけて相手の行為に対する「禁止」が増加し、「非難」が減少した。また、「攻撃」は中期以降減少する傾向が見られた(本郷, 1996)。この結果から、2 歳児クラスにおいて、次第に不快情動を攻撃や非難として表出するのではなく、言語的に主張することができるようになることが示唆される。

また、幼稚園の 3 歳児クラスにおけるいざこざに関して、6～7 月頃には相手の不快な働きかけに対し無抵抗のまま終わってしまうことも多かったが、次第に自己主張が強くなり、翌年 1～2 月にはある程度自分の情動を調整したり、相手の意見を聞いてお互いに意見を調整できるようになることが報告されている(木下・斉藤・朝生, 1986)。さらに、幼稚園の 5 歳児クラスのいざこざについて、さまざまな言語的方略が使用され、また、使用される方略は一緒に遊んでいる集団に属しているのか、異なる遊び集団に属しているのかという関係の違いによって異なることが示されている(倉持, 1992)。

このように、保育所の 0 歳～1 歳児クラスでは、次第に相手に対する怒りの情動が明確になり対人葛藤が成立するようになるが、この時期の葛藤の解決には保育者の仲立ちが重要であり、保育者は子どもの発達に応じて介入方法を変化させていくと考えられる。また、2 歳児クラスにおいては次第に怒りや要求を言語的に主張することが可能になる。幼稚園の 3 歳児クラスでは、入園当初は対人葛藤が成立しないが、次第に自己主張が強くなり、後期には自分の情動を調整し相互理解による葛藤解決ができるようになる。さらに、5 歳

児になると、むやみに情動を高めることなく状況や関係性に応じ多様な方略を用いるようになることが示唆される。これらの研究において、仲間関係が情動調整の発達に果たす役割に関しては明確に検討されていないが、保育園の2歳児クラスでは言語的な主張や異議が可能であるにも関わらず、幼稚園の入園当初(3歳児)は相手に抵抗せずいざごご自体があまり成立しないことから、園生活で仲間との葛藤の経験を積み重ねることにより、不快感情を抑制しすぎることなく適切に表現することができるようになると思われる。

ただし、以上の研究においては、主に葛藤解決方略の発達的变化が検討されており、情動調整は直接扱われていない。ここではほとんど検討されていない情動焦点型の対処を含め、仲間関係における情動調整の発達的变化に焦点を当てた実証的研究が待たれる。

B 仲間関係と情動調整の個人差

情動調整能力の個人差は、仲間との関係にどのように関連するのだろうか。

不快情動が喚起される仲間との葛藤においては、情動を調整しながら対処することが必要とされる。したがって、情動調整能力は対人葛藤への対処行動に影響すると考えられる。例えば、フラストレーション課題に対してよく不快情動を表出し、適応的でない情動調整行動(攻撃や発散、対象物への焦点化)を示した24ヶ月児は、仲間との相互作用場面で攻撃行動を示す傾向があった。一方、不快情動を表出しても、気晴らし、母親志向的行動(援助を求める、遊ぼうとする)、自己に焦点化した行動(指しゃぶりや髪を触る)を示した子どもは、あまり攻撃行動を示さなかった(Calkins, Gill, Johnson, & Smith, 1999)。また、保育者評定による建設的対処、注意のコントロールなど情動調整の得点が高い4～6歳の男児は、怒りを喚起される場面で建設的な対処(言語的抗議)を示す傾向があった。一方、保育者評定による行動化や回避による対処、情動の激しさ、怒りの激しさの得点が高い子どもは、怒りを喚起される場面で建設的対処をあまり示さない傾向があった(Eisenberg, Fabes, Nyman, Bernzweig, & Pinuulas, 1994)。このように、情動性(emotionality; ネガティブな情動の喚起されやすさ)が高く情動調整が不適切な子どもは仲間との葛藤において不適応的な行動を示す傾向がある。また、怒りを喚起される場面でさらなる葛藤や社会的関係へのダメージを最小限にするような方法で対処する子ども(平均55.4ヶ月)は、社会的地位(仲間による好意的評価)が高い傾向がある(Fabes

& Eisenberg, 1992)。

このように、情動調整能力は、仲間との相互作用における社会的な行動や情動の表出に影響し、さらには仲間からの評価や保育者による社会的コンピテンスの評価に影響する。例えば、就学前の男児(平均62.1ヶ月)において、保育者評定による建設的対処と注意のコントロールの得点が高い子どもは、保育者評定による社会的スキルおよび社会的地位が高い傾向があった。また、行動化による対処と情動性の高さは、女児(平均61.4ヶ月)と男児の社会的スキル、男児の社会的地位と負の関連があった(Eisenberg, Fabes, Bernzweig, Karbon, Poulin, Hanish, 1993)。

こうした情動調整の個人差はその後の仲間関係にも影響するのだろうか。NICHD Early Child Care Research Network(2004)は、24ヶ月時に調整不全を示した子どもは、その後(54ヶ月時、幼稚園時、小学校1年時)の母親評定、教師評定による社会的スキルが低かったと報告している。また、低収入家庭の男児を対象にした Gilliom, Shaw, Beck, Schonberg, & Lukon (2002)は、母親のコントロールと愛着を統制すると、3歳半時のフラストレーション課題における気晴らしは、6歳時の教師評定による externalizing な問題行動の低さ、協調性の高さに関連しており、情報収集による情動調整は主張性の高さに関連していることを示した。これらの結果から、情動調整能力はその時点での仲間関係に関連するだけでなく、ある程度その後の仲間関係にも影響するようである。では、こうした影響の持続性は何によって生じるのだろうか。その可能性のひとつとして、情動調整の困難さにより仲間との関係性が悪化すると、適度な葛藤と関係修復の経験等を通じて情動調整能力を発達させる機会が少なくなり、それがその後の仲間関係にマイナスに影響するという悪循環の存在が考えられる。こうした悪循環を断ち切るために、保育者はそうした子どもたちの情動調整能力を育て、仲間関係の仲立ちをすることが求められるだろう。それが保育者のどのような関わりによって可能になるのかについて検討することは今後の課題である。

以上、保育の文脈で子どもが経験する関係として、主に仲間関係を取り上げたが、保育者との関係性も情動調整の発達に重要な役割を果たすと考えられる(図1の矢印⑤)。今後、保育者が子どもの不快情動に対しどのように関わるのか、どのような関わりが子どもの情動調整の発達を促すのかなどについても検討することが必要である。

5 家庭における関係性と保育における関係性との関連

本章では、情動調整の発達において家庭における関係と保育における関係がどのように関連しあうのかについて検討する。(図1の矢印⑥, ⑦)。

まず、家庭から保育の場へという方向性の影響(図1の矢印⑥)について、Garner & Spears(2000)は、家庭において表出される情動の適切性が高いと、保育園の自由遊びにおいて怒りや悲しみが喚起される場面で非建設的対処をあまり示さない傾向があること、また、一貫性のないしつけは非建設的な対処と関連していることを報告している。また、低年齢時に母親と同席の場面で示された情動調整がその時点、あるいはその後の社会的行動と関連していることも示されている(Calkins, et al., 1999; NICHD Early Child Care Research Network, 2004; Gilliom, et al., 2002)。これらの結果から、母親との関わりにおいて獲得された情動調整スキルが保育の場で仲間と関わる際に適用されることが示唆される。一方、保育者との関わりにおける情動調整について、Feldman & Klein(2003)は、情動調整と関連する概念だと考えられる自己制御的な従順さ(self-regulated compliance)について検討している。その結果として、両親への従順さと保育者への従順さが関連しており、母親の敏感性とあたたかいコントロールが保育者に対する従順さと関連していることを示した。このように、子どもは母親との関わりにおいて獲得した情動調整スキルを携えて保育の場へと参入し、それを保育者との関係や仲間関係において発揮していく可能性が考えられる。

次に、保育の場から家庭へという方向性の影響について検討する(図1の矢印⑦)。Morales & Bridges(1996)は、フラストレーション場面で母親が積極的に関わる条件において、早期から長時間の保育を経験している子どもや、保育者の交代を何度も経験した子どもは、自己志向的な情動調整行動(ひとりで遊ぶ、自己慰撫)を示し、そうでない子どもは他者志向的な情動調整行動(母親と遊ぶ、接触する)を示すことを報告している。彼らは、この結果について、早期からの集中的な保育や、保育者の交代が多いあまり質のよくない保育を経験した子どもは、母親に対してやや回避的になっているという解釈をひとつの可能性として提示している。すなわちあまり質のよくない保育は母親との関わりにマイナスに影響することが示唆される。一

方、質のよい保育が母親との関わりにおける子どもの情動や行動の調整にプラスに働く可能性について、Howes and Olenick(1986)は、質のよい保育(保育者の割合が多い、保育者が正式なトレーニングを受けている、保育者の交代が1年以上ない)を経験している子どもは、質のよくない保育を経験している子どもや保育を経験していない子どもよりも、親が同席の場面で触ることを禁止されたおもちゃに触らないようにするなどの自己制御的な行動を示すことを見出している。これらの研究は、保育者の関わりを直接検討したものではないが、保育者の割合やトレーニングの有無等は保育者の関わりを規定していると考えられる。よって、これらの結果は保育者の関わりと情動調整との関連を部分的には反映しているだろう。今後は、保育者の「関わり」にも焦点を当て、保育から家庭への影響についてより詳細に検討することが必要である。

本章では、家庭から保育へ、保育から家庭へという両方向の影響が示唆された。これは、子どもが家庭と保育で経験する関係性の間に相互の連関がある可能性を示唆していると考えられる。ただし、こうした連関性について、母親の関わりによさが質のよくない保育の影響を緩和したり、質のよい保育が母親との関わりへの難しさの影響を緩衝したりするのか等については、今後の検討が必要である。

6 まとめと今後の課題

家庭と保育において経験する関係性が情動調整の発達にどのように関連するのかについて、先行研究を整理することを通じて示唆されたことと今後の課題をまとめる。

子どもは、家庭における母親との関わりの中で、情動調整スキルを獲得する。そしてその情動調整スキルを携えて保育の場に参入し、保育の場で経験する仲間や保育者との関係においてそれを発揮する。保育の場では、そうした関係の中で新たな情動調整のスキルを身につける。一方保育の経験は、母親との関わりにおける情動調整に影響する。このように子どもが家庭と保育という世界を行き来することにより、それぞれの場で経験する関係性の間に相互の連関が生まれ、子どもはこうした連関の中で情動調整を発達させていく可能性がある。今後、各章末尾に示した課題について実証的な研究を行うことにより、こうした家庭と保育の相互の連関性についてより精緻に検討していくことが求

められる。

最後に、こうした家庭と保育の相互関連性を持つ実践的な意味について指摘したい。昨今、少子核家族化の進行により、子育て家庭が孤立し、家庭内や近隣で子どもが多様な人間関係を体験する機会が減少している(朽尾, 2002)。家庭は閉塞的な場となりやすく、母親との関わりの中で子どもが情動調整の困難さを抱えてしまうと、他者が介入することによってその困難さを緩和させることが難しいといった事態が生じうる。このような場合に、家庭と保育が相互に関連しあうということは重要な意味を持つと考える。子どもが保育の場に参入するということは、それまでとは異なる多様な関係性を体験するということを意味している。家庭で情動調整の難しさを抱えた場合、子どもは保育の場における仲間や保育者との関わりの中で情動の調整不全を示すかもしれない。保育者はその子どもに対し丁寧かつ適切に関わることで子どもの情動調整の発達を少しずつ促していく。子どもは保育者に関わってもらった経験を家庭に持ち帰り、母親との関係において変化を示す可能性がある。これはそれほど容易なことではないであろうが、子どもが保育を経験することで、こうしたプラスの循環が生じる可能性があるのではないだろうか。また、子どもが保育の場へ参入することは、親と保育者との関係性が生まれるということも意味している。保育者は、親の気持ちを支えることや子どもとの関わり方をアドバイスすること等を通して、間接的に親子の関わりにおける情動調整の発達を支えることができる可能性がある。今後、保育者が情動調整の困難さを抱えた子どもやその親とどのように関わることで、また、どのようなプロセスを経ることでここに示したようなプラスの連関が生み出されるのかについても実証的に検討することにより、実践的示唆が得られると考える。

(指導教官 田中千穂子教授)

引用文献

- 朝生あけみ・斎藤こずゑ・荻野美佐子 1991 0～1歳児クラスのいざごにおける保母の介入の変化 山形大学紀要(教育学), 10, 99-110.
- Bridges, L. A., & Connell, J. P., 1991 Consistency and inconsistency in infant emotional and social interactive behavior across contexts and caregivers. *Infant Behavior and Development*, 14, 471-487.
- Bridges, L. J., Grolnick, W. S., & Connell, J. P. 1997 Infant emotion regulation with mothers and fathers. *Infant Behavior and Development*, 20, 45-57.
- Bringen, Z., Emde, R. N., & Pipp-Siegel, S. 1997 Dyssynchrony, conflict, and resolution: positive contributions to infant development. *American Journal of Orthopsychiatry*, 67, 4-19.
- Braungart, J. M., & Stifter, C. A. 1991 Regulation of negative reactivity during the strange situation: Temperament and attachment in 12-month-old infants. *Infant Behavior and Development*, 14, 349-364.
- Calkins, S. D., Gill, K. L., Johnson, M. C. & Smith, C. L. 1999 Emotional reactivity and emotional regulation strategies as predictors of social behavior with peers during toddlerhood. *Social Development*, 8, 310-334.
- Calkins, S. D. & Johnson, M. C. 1998 Toddler regulation of distress to frustrating events: Temperamental and maternal correlates. *Infant Behavior and Development*, 21, 379-395.
- Calkins, S. D. Smith C. L., Gill, K. L. & Johnson, M. C. 1998 Maternal interactive style across contexts: Relations to emotional, behavioral and physical regulation during toddlerhood. *Social Development*, 7, 350-369.
- Cole, P. M., Martin, S. E., & Dennis, T. A., 2004 Emotion regulation as a scientific construct: Methodological challenges and directions for child development research. *Child Development*, 75, 317-333.
- Diener, M. L. & Mangelsdorf, S. C. 2000 Behavioral strategies for emotion regulation in toddlers: Associations with maternal involvement and emotional expressions. *Infant Behavior and Development*, 22, 569-583.
- 遠藤利彦 1997 愛着と発達 井上健治・久保ゆかり(編)子どもの社会的発達 東京大学出版会
- Eisenberg, N., Fabes, R. A., Bernzweig, J., Karbon, M., Poulin, R., & Hanish, L. 1993 The relations of emotionality and regulation to preschoolers' social skills and sociometric states. *Child Development*, 64, 1418-1438.
- Eisenberg, N., Fabes, R. A., Nyman, M., Bernzweig, J., & Pinuelas, A. 1994 The relations of emotionality and regulation to anger-related reactions. *Child Development*, 65, 109-128.
- Fabes, R. A. & Eisenberg, N. 1992 Young children's coping with interpersonal anger. *Child Development*, 63, 116-128.
- Feldman, R., & Klein, P. S. 2003 Toddlers' self-regulated compliance to mothers, caregivers, and fathers: Implications for theories and socialization. *Developmental Psychology*, 39, 680-692.
- Fox, N. A. & Calkins, S. D. The Development of self-control of emotion: intrinsic and extrinsic influences. *Motivation and Emotion*, 27, 7-26.
- Garner, P. W., & Spears, F. M. 2000 Emotion regulation in low-income preschoolers. *Social Development*, 9, 246-264.
- Gilliom, M. Shaw, D. S., Beck, J. E., Schonberg, M. A., & Lukon, J. L. 2002 Anger regulation in disadvantaged preschool boys: strategies, antecedents, and development of self-control. *Developmental Psychology*, 38, 222-235.
- Grolnick, W. S., Bridges, L. J., & Connell, J. P. 1996 Emotion regulation in two-year-olds: Strategies and emotional expression in four contexts. *Child Development*, 67, 928-941.

- Grolnick, W. S., Kurowski, C. O., McMenemy, J. M., Rivkin, I., & Bridges, L. J. 1998 Mothers' strategies for regulating their toddlers' distress. *Infant Behavior and Development*, 21, 437-450.
- 本郷一夫 1996 2歳児集団における「異議」に関する研究—子どもの年齢と年齢差の影響について— 教育心理学研究, 44, 435-444.
- 本郷一夫・杉山弘子・玉井真理子 1991 子ども同士のトラブルに対する保母の働きかけの効果—保育所における1~2歳児の物をめぐるトラブルについて— 発達心理学研究, 1,107-115.
- Hows, C., & Olenick, M. 1986 Family and Child Care influences on toddler's compliance. *Child Development*, 57, 202-216.
- 倉持清美 1992 幼稚園のものをめぐる子ども同士のいざこざ—いざこざで使用される方略と子ども同士の関係— 発達心理学研究, 3,1-8.
- Karraker, K. H., Lake, M. A., & Parry, T. B. 1994 Infant coping with everyday stressful events. *Merrill-Palmer Quarterly*, 40, 171-189.
- 金丸智美・無藤隆 2004 母子相互作用場面における2歳児の情動調整プロセスの個人差, 発達心理学研究, 15, 183-194.
- 川井尚・恒次欽也・金子保・白川園子・二木武 1983 乳児—仲間関係の縦断的研究 I—初期の発達の变化. 小児の精神と神経, 23, 35-42.
- 木下芳子・斉藤こずゑ・朝生あけみ 1986 幼児期の仲間同士の相互交渉と社会的能力の発達—3歳児におけるいざこざの発生と解決— 埼玉大学紀要教育学部(教育科学), 35, 1-15.
- 小松孝至 2003 幼児期の親子関係・家族関係 無藤隆・岩立京子(編著)乳幼児心理学 北大路書房
- Kopp, C. B. 1989 Regulation of distress and negative emotions: A developmental view. *Developmental Psychology*, 25, 343-354.
- 鯨岡峻・鯨岡和子 2004 情動調律と情動制御 よくわかる保育心理学 ミネルヴァ書房
- Lazarus, R. S., & Folkman, S. 1991 ストレスの心理学: 認知的評価と対処の研究(本明寛・春木豊・織田正美訳). 東京: 実務教育出版. (Lazarus, R. S., & Folkman, S. 1984 Stress, appraisal, and coping. New York: Springer.)
- Mangelsdorf, S. C., Shapiro, J. R., & Marzolf, D. 1995 Developmental and temperamental differences in emotion regulation in infancy. *Child Development*, 66, 1817-1828.
- 松永(朝生)あけみ・斉藤こずゑ・荻野美佐子 1993 保育園の0~1歳児クラスの子どもの同士のいざこざにおける社会的能力の発達 山形大学紀要(教育科学), 10, 505-517.
- Morales, M. & Bridges, L. J. 1996 Associations between nonparental care experience and preschooler's emotion regulation in the presence of the mother. *Journal of applied Developmental Psychology*, 17, 577-596.
- 無藤隆 1997 子どもの協同の過程 協同するからだことば—幼児の相互交渉の質的分析— 金子書房
- Nachmias, M., Gunner, M., Mangelsdorf, S., Parritz, R. H., & Buss, K. 1996 Behavioral inhibition and stress reactivity: The moderating role of attachment security. *Child Development*, 67, 508-522.
- NICHD Early Child Care Research Network 2004 Affect dysregulation in the mother-child relationship in toddler years: Antecedents and consequences. *Development and Psychopathology*, 16, 43-68.
- Parritz, R. H. 1996 A descriptive analysis of toddler coping in challenging circumstances. *Infant Behavior and Development*, 19, 171-180.
- 坂上裕子 1999 歩行開始期における情動制御: 問題解決場面における対処行動の発達 発達心理学研究, 10, 99-109.
- 坂上裕子 2002 歩行開始期における母子の葛藤的やりとりの発達の变化: 一母子における共変化過程の検討 発達心理学研究, 13, 261-273.
- Shpancer, N 2002 The home-daycare link: mapping children's new world order. *Early Childhood Research Quarterly*, 17, 374-392.
- Spinrad, T. L., Stifter, C. A., Donelan-McCall, N., & Terner, L. 2004 Mother's regulation strategies in response to toddlers' affect: Links to later emotion self-regulation. *Social Development*, 13, 40-55.
- Taylor, G. J., Bagby, R. M., & Parker, J. D. A. (Eds.) 1998 アレキシミア—感情制御の障害と精神・身体疾患(福島勇夫監訳/秋元倫子訳). 東京: 星和書店. (Taylor, G. J., Bagby, R. M., & Parker, J. D. A. (Eds.) 1997 Disorders of affect regulation: Alexithymia in medical and psychiatric illness. Cambridge University Press.)
- Thompson, R. A. 1990 Emotion and self-regulation. In R. A. Thompson(Ed.), *Socioemotional development. Nebraska Symposium on Motivation: Vol.36*(pp.367 - 467). Lincoln, Nebraska: University of Nebraska Press.
- Thompson, R. A. 1994 Emotion regulation: A theme in search of a definition. In N. A. Fox(Ed.), *The development of emotion regulation. Biological and behavioral considerations*(pp.25 - 52). *Monographs of the Society for Research in Child Development*, 58(2-3, Serial No.240).
- 朽尾勲 2002 保育の場 朽尾勲・泉千勢(編)保育原理 社会福祉法人全国社会福祉協議会
- 常田秀子 1997 乳幼児保育と発達 井上健治・久保ゆかり(編)子どもの社会的発達 東京大学出版会
- Volling, B. L., McElwain, N. L., & Miller, A. L. 2002 Emotion regulation in context: The Jealousy complex between young siblings its relations with child and family characteristics. *Child Development*, 73, 581-600.
- Walden, T. A. & Smith, M. C. 1997 Emotion regulation. *Motivation and Emotion*, 21, 7-25.
- Wood, D., Bruner, J. S., & Ross, G. 1976 The role of tutoring in problem solving. *Journal of Child Psychology and Psychiatry*, 17, 89-100.